

陸空、軍用犬航空医療搬送訓練 *Airmen, Soldiers train on K-9 Aeromedical Evacuations Capabilities*

August 31, 2020

By Staff Sgt. Juan Torres
374th Airlift Wing Public Affairs

第459空輸中隊、第374憲兵中隊、第18航空医療搬送中隊(AES)の空兵は8月20日、在日公衆衛生活動(PHA-J)、動物医療施設(VTF)の兵士と協力し、C-12Jを用いた軍用犬航空搬送訓練に参加した。

この訓練は、第459空輸中隊C-21Jヒューロンで軍用犬を医療搬送する手順に焦点を当て、第374憲兵中隊の軍用犬のハンドラーと航空搬送のクルーが、負傷した犬のパラメータ、経路上の要件、軍用犬への一般的な怪我の基礎的な処置と治療に焦点を当てる実践的な医療対応のシナリオに基づいて行われた。

この能力を更に発展させることで、軍用犬を管轄区域内にある設備の整った施設に搬送する際、空兵と兵士はより効率的に対応できるようになる。

第459空輸中隊C-12J教官パイロットのニコラス・ストローベル大尉は、「軍用犬が任務できる状態を維持することは、米国軍人と同等に高い優先度を持つ。そのため、軍用犬が負傷した場合、居る場所で受けられる医療よりも高度な医療を必要とする場合には、第18航空医療搬送中隊が安全かつ快適に目的の医療施設に搬送する」と述べた。

「この能力は他ではあまり類を見ないが、軍用犬と獣医サポートチームにとって重要な任務だ。小規模な動物医療施設では、長期化したり複雑な症例に対応する人員や設備が整っていない。手順のリハーサルを行い、人と獣医チームの間で共通の運用イメージを構築するための演習を実施することは、将来の動物の搬送を効率化するために重要だ」と在日公衆衛生活動事務所役員ジェームス・ガフニー米陸軍少佐は述べた。

「運用上の障壁を理解し、どのような機材が航空機に搭載されているか、どのような課題に直面する可能性があるか、そして動物を移動させる際にどう対応するのが最善かを把握することが、今回の訓練の重要な目的だった」とガフニー少佐は述べ、「実際の任務を想定し、軍用犬を輸送する物理的な演習を行うことは、航空機の構成や利用可能な様式を理解するのに役立ち、どのような獣医学に特化した装備がなくてはならないかを把握するのに役立った」と付け加えた。

適切な装備と準備を整えることで、チームは管轄地域で実際に起こりうる航空医療搬送により適切に備えることができる。

「チーム横田が過去にこの種の任務を必要としなかったのは幸運だったが、将来に備え、より適切に準備ができていることを確信しており、他の軍用犬施設や在日公衆衛生活動事務所動物医療施設とも教訓を共有できる」とガフニー米陸軍少佐は述べた。

